「アメリカ独立革命」と日本の関係

増山雄三

「アメリカ独立革命」というのは、イギリス領北アメリカの、十三植民地にあった民兵隊が連合して、イギリス軍との間で戦火が交えられたが、一七七六年七月、トーマス・ジェファーソン起草の、「独立宣言」を発せられて、分離と独立を達成して、共和制の新国家を作った、という革命を指している。

それでも、宣言後も戦いは続いたが、米仏同盟締結後にフランス海軍の援助を得て、戦況を有利に進め、遂に、一七八三年に、イギリス軍との最後の戦いに勝利し、アメリカ最初の憲法である「連合規約」が制定された。

それで、この革命の期間は、一七六三年のフレンチ・アンド・インデアン戦争の終結から、一七八三年のパリ平和条約迄の二十年間をさすが、この革命は独立と建国という、二

重の課題を解決したので、イギリスやフランス革命にはない、独自の性格を持っている。

それでこの革命は、当初は北部のニューイングランド地域が中心とした、十三植民地だけとされていたが、南部においても、独立に向けての、住民の切なる発展志向があった、という見方がされている。

それは、欧州諸国の動きを含む、「**環大西洋史観**」という見方で、独立革命そのものについて見直しをし、合衆国憲法には、民主主義の行き過ぎを、防ぐ役割があったなどとされ、革命を巡る内容が、新たな角度から見直されている、というのが当時の現状だった。

それで近年には、白人男性中心主義から、黒人や女性それに先住民たちが、革命で果たした役割に注目し、その方面からも再評価する研究も、少しずつ脚光を浴びている。

現在、自他ともに超大国を任じる米国は、四年後の二〇二六年、独立宣言から二百五十年の節目を迎え、英国からの独立を宣言した

当時は、北米大陸北岸の、十三植民地で組織する、集合体に過ぎなかった。

ただ、同じ植民地でも、産業構造は多様だったというが、北部のニューイングランド地方は、独立自営農民多い反面、南部は国人奴隷を使役する、大規模農園である、いわゆるプランテーシが中心だった。

それで、独立戦争の植民地軍の司令官で、後に初代大統領になる、ジョージ・ワシントン（一七三二～九九）も、南部バージニアの植民地にあった、大規模農場主で、黒人奴隷を多数にわたり使役していた。

米国の独立革命は、北部が英国に対して、権利や自由を求めた《ニューイングランド中心史観》が、これまでの大勢だったが、一九八〇年代以降、南部においても、独立の契機となる社会を志向した社会だった、という見方が強まってきている。

その背景として、十三植民地では十七世紀以降の欧州からの植民を通して、独自のアメ

リカ意識が醸成され、特に独立以降は、生活様式や思想活動においても一体感が生まれたと、関係者は解説している。

近年は、米国の一国史に留まらず、先述の「**鐶大西洋史観**」と呼ばれる見方に変り、独立宣言も対植民地住民よりも、対欧州諸国を意識して発せられた、という見方が主流だ。

一七八七年の合衆国憲法も、従来は理想主義的面が強調されてきたが、研究者は、米国で民主主義が作られたというのは神話に過ぎず、憲法に三権分立を取り入れるという面をだけ見ても、人民の民主主義の行き過ぎを否定して、権力を相互に牽制する仕組みを作った、と見るのが適当だという。

それで、米国の独立史は、植民地における英国の強圧に対して、人民が自由と権利を求めて立ち上がった、という主軸は変らないものの、その過程において新たな光が、様々に当るようになってきたのである。

その一つに、マイノリティーへの見方への

変化があり、それは、これまで顧みられなかった黒人や女性が、独立戦争で果たした役割をさすが、中には、奴隷を脱した自由黒人たちも、数多く参戦する姿も見られた。

その背景には、それに先立つ開戦時の議会では、黒人が植民地のために、果して戦うかどうか議論されたが、戦争が続いて兵力が足りなくなると、自由黒人も動員せざるをえなくなったと、当時の実情が明かされている。

それで、白人と黒人は、当初は共に戦ったが、やがて人種別の部隊が編成され、開戦当時は十三植民地全てに奴隷制があったが、北部では、開戦で奴隷貿易や奴隷制の廃止に繋がるなど、マイノリティーの解放に果たした役割も大きかったが、南部は依然として奴隷制が続いて、その廃止は、南北戦争まで待たねばならなかったのである。

また一方では、女性で大活躍した人物もいたが、それは、詩人で作家でもあり、歴史家としても活躍していた、マーシー・オブライ

エン（一七二八～一八一四）で、憲法制定の翌年には、「新憲法への所見」を刊行した。

彼女はその中で、強力な中央集権体制への反対を表明したほか、独立当初から米国史を書き始め、一八〇五年に「米国革命の勃興，進行、終結の歴史」を出版したが、この本というのは、米国で女性が初めて出版した、ノンフィクションとして知られる。

そのほか、革命のための募金活動を行なった女性や、軍隊に同行して、後方支援を行なった女性などについても、近年は研究が進んでいて、ネイティブ・アメリカンも含め、独立期の少数派たちの研究は、今後、より一層盛んになって行く、と見られている。

ところで、幕末のペリー来航で開国へと舵を切った日本は、革命の歴史を中国の書物で知り、福沢諭吉は「西洋事情」を顕して、アメリカの独立宣言の中身を伝えた。

それで、福沢の「学問のすゝめ」の冒頭に「天は人の上に人を造らず人の下に人を造ら

ず」の名言に、独立宣言の影響があると、米国史に詳しい学者はいうが、米国独立革命における「独立宣言」や「合衆国憲法」は、それらを通じて、日本に大きな影響を与えた。

また、太平洋戦争後の「GHq（連合国軍総司令部）」による、日本国憲法の草案は、全てが英語表記だった事がよく知られているが、これには、アメリカの独立宣言や合衆国憲法などにある、エッセンスが多く取り入れられている、というものになっているのは、敗戦国としては止むをえない所だ。。

それで、初期米国史に詳しい明治大学の鰐淵教授は、「幕末に戦後と、日本の歴史上の重大な局面で、米国独立革命の影響は、一般の日本人が考えている以上に大きい。現在の日本国憲法や、政治体制にまで影響が及んでいる事を、よく知っている人は少ない」と鰐淵さんは推測しているが、それについて、日本人はもっと学ぶべきだと話している。

令和四年八月